
特集：徳島県の医療と教育：その現在と未来

大学病院の役割

安井夏生

徳島大学病院病院長

少子高齢化が進む中で医療費が国民の負担となっている。人口が減っても高齢者が増えれば医療費は減らないためだ。また同じ地域内の中核病院がこぞって急性期医療をめざせば、設備や人員の重複投資がおり、結果的にその地域の医療費の高騰を招くことになる。「うちの病院」が「生き残りをかけて」「競争して勝つ」時代ではない。徳島県において本当に必要な急性期病床は何床であるのか、われわれ自身が冷静に見極める必要がある。病院の役割・機能を自分たちで見直し、病院間の連携、協力、場合によっては縮小や統廃合も視野に入れた対応を考えていかなければならない。大学病院として例外ではない。

徳島大学病院は県下唯一の特定機能病院として ①高度医療の実践、②医療人の養成、③新しい高度医療の開発、を担う責務がある。その中で ①高度医療の実践は大学病院以外でもある程度可能な時代となった。また ②医療人の養成も卒後臨床教育などは大学病院よりも臨床研修病院のほうが適切な場合もある。これからは学部学生の教育にも関連病院の参画を得ないとできない方向にある。

最近、世界医学教育連盟（WFME）や日本医学教育

認証評議会（JACME）の指導のもとに医学部学生の教育カリキュラムの見直しが行われている。学生時代に72週間以上の臨床実習を受けていないと米国国家試験（ECFMG）の受験資格を認めないというのである。徳島大学病院では2023年までに臨床実習を72週間に増やす計画をたてているが、大学病院だけで全ての実習カリキュラムを負担するのはスケジュール的に無理がある。学外実習という形で学生を受け入れ、医学部教育に参加していただける関連病院群を募る必要がある。

米国では大学病院が関連病院と連携・協力して診療、教育、研究にあたるシステムが確立している。本邦でも岡山県では岡山大学が中心となり、「岡山大学メディカルセンター構想」を打ち立てたところである。経営母体の異なる5つの病院（岡山市民病院、岡山労災病院、岡山赤十字病院、岡山済生会総合病院、国立病院機構岡山医療センター）が岡山大学病院と「非営利ホールディングカンパニー型法人」を形成し、ヒト、モノ、カネを効率よく一体運用するという構想である。人口75万人の徳島県で医療費を抑え、県民に良質の医療を提供しつつ次世代を支える医療者を養成するには、大学病院と中核病院の連携・協力的体制づくりが必須である。